

法意識を視点とした歴史授業開発

—中学校の歴史単元「中世の罪と罰」の場合—

Developing History Lessons on the Viewpoints of “Conscience of Law”: A Case of History Unit in Junior High School “Crime and Punishment in the Japanese Medieval History”

乾 則 夫

(神戸市立布引中学校)

I 研究のねらい

現在の深刻な少年問題の一つに「犯罪やいじめ」がある。それらについては少年の規範意識の低下等さまざまな原因が指摘されており、一概に社会との関係を即断することはできないが、生徒にとってきわめて身近な社会問題であることだけは確かであろう。それゆえ社会科教育においてもこの問題を等閑視してはならないといつてよい。

こうした問題意識のもとに、本研究では「法意識」(人々の法の捉え方と行動特性)の視点から中学校の歴史学習について考察した。なぜなら法意識には社会の構成員の心性が反映されているはずであり、法意識を手がかりにすれば当該社会の実相に迫りうると思ったからである。

そもそも歴史を学ぶ楽しさは、「なぜ?」といった知的好奇心から発する問いに基づいて、多様な史資料を参照し、イメージ形成や仮説検証を経て、一定の歴史像を構成していく「過程」にあるはずである。そしてそのようにして得られた知識や認識方法こそが、学びの結晶として生徒の心に残るといえる。同時にそのような歴史の学びが、生徒に歴史を通して自己と社会を見つめる目を育て、社会の中で主体的に生きていく態度を形成していくことにつながるのではなからうか。

上述のような問題意識を踏まえて法意識を視点とした歴史の教材開発を試みる時、最も興味深いのが中世である。なぜなら中世の法意識は、他のどの時代よりも現代の法意識との間に共通性や異質性を顕著に見出すことができるからである。例えば、盗み(「万引き」を含む)や悪口は、現代の生徒たちに決して無縁ではないし、生徒の中にはそれらに関して罪意識の希薄な者も珍しくない。

中世の日本でもそれらは罪として捉えられていたが、現代とは全く異質な見方がなされていた。それはいったいなぜか。このように、盗みや悪口に着目することで、中世の人々の心性(罪と罰の意識)に迫るとともに、生徒自身の法意識を反省的に吟味する歴史学習が可能となろう。

ところで、原田智仁氏や加藤公明氏等の先行研究にもある通り、これまでに中世の法意識に視点を当てた授業研究がなされている¹⁾。特に加藤氏の実践は、中世と現代の人々との価値観やものの見方との相対化を討論を通して展開した授業開発で、本研究とも関連性が高い。ただ本研究は、①生徒の切実性のある身近な問題をテーマ設定している、②中世と現代の人々との法意識の相対化を通して、生徒の価値観(規範意識等)の再構成を意図したものであり、その意味でねらいと方法において、先行研究とは一線を画すものと考ええる。

以上のように本研究では、「窃盗」といじめ行為としての「悪口」の事例を中心として、中世の法意識と現代との法意識を比較考察する場を設定し、中世の人々の心性に迫るとともに、生徒自身の法意識を反省的に吟味する授業モデルの開発を目的としている。

なお、「法意識」の概念については、六本佳平氏の「法(体制)自体についての理解の仕方ないしその態度、具体的には、規範意識や権利意識、遵法精神、契約観念等の要素に分解しうる²⁾」との見方に依拠した。また歴史学者の福井憲彦氏は、法制度の現実の実効性は、法制度の執行行動と法制度に対する人々の対応行動との相互作用関係から捉えるべきことを指摘している³⁾。よって中世

の法意識を視点に据える時には、六本氏の見方を踏まえつつ、次のように規定した。すなわち「中世の法制度のみならず、法定立の基底にある意識（武士社会の道理や在地社会の因習等）やそれと連動する实际的行動（法の執行行動と対応行動）」を着目・考察対象とする。

Ⅱ 歴史学研究からみた中世日本の法意識

1. 中世における「盗み」と「悪口」

（1）「盗み」の罪

笠松宏至氏によれば、中世の在地社会において「盗み」は、原状復帰が不可能な「重罪」として認識されており、死刑等の苛酷な刑罰が科されることが多かったという⁴⁾。なぜなら『もの』には持ち主の魂が宿っている」のであり、盗まれたものは、「汚されたもの、失われたもの」と捉えられていたからである。

一方、幕府は盗みを単なる銭で換算する意識と「撫民方針」から、盗みを「軽罪」と見なし、在地の行き過ぎた刑罰をコントロールしようとした。このように、盗みの犯罪観をめぐっては、幕府側と在地側の二重構造が指摘されている。

（2）「悪口」の罪

成文法上稀有な存在として「悪口」罪が御成敗式目 12 条に規定されている。笠松氏は、中世において「悪口」罪が適用された条件として「身体的（例：盲目）・身分的（例：甲乙人）蔑視表現」、「性的タブー表現（例：母親との相姦を意味する表現としての「母聞」）」を指摘している⁵⁾。これ以外にも入間田宣夫氏によれば、特に在地社会においては、「言葉の持つ呪力性」が信じられ、悪口や喧騒は静寂を破り、穢れを生む行為として忌み嫌われていたという⁶⁾。

ただ網野善彦氏が述べているように、すべてにおいて喧騒が忌み嫌われたわけではなく、逆に「門前、市、河原」等の「非日常世界では、男女は自由に「高声」をあげ、歌い、商人は大声で客を呼ぶことができた」のである⁷⁾。ところで、鎌倉幕府は悪口罪を規定しておきながら、それを適用するケースは稀であった。他方、在地においては悪口をめぐって訴訟沙汰、科料の徴収、悪口を放った者の追放・住宅破却等が行われ、悪口を重

大視する現象が見られる。つまり、「悪口罪」においても、「盗み」同様、犯罪観の二重構造が指摘できるのである。

2. 中世法における訴訟制度と刑罰の特質

（1）中世の訴訟制度

公権力が分裂していた中世には、朝廷や貴族、社寺、幕府、さらに地頭や惣等がそれぞれ裁判権力をもっており、多元的な法秩序を形成していた。中世の裁判は、「獄前の死人、訴えなくば検断なし」という法諺が示すように、「当事者主義」が原則である。もちろんこの原則は「政権に直接関係のない刑事事件」についてのみにあつた。笠松氏はこの当事者主義の原則について、訴人による論人への訴状提出や法の存在証明を当事者同士が行う等、訴人による経済的負担や肉体的危険性等が大きく、容易な出訴・裁判継続の困難性を指摘している⁸⁾。

また中世の裁判のもう一つの特徴として、「神判」がある。神判とは、主張の真偽、有罪の有無を神意によって判断する裁判方法で、「湯起請や籤」等の神判が行われた。山本幸司氏によれば、神判は、多分に中世の神を媒介とする呪術的な要素を含んでいると同時に、論理的解決が不可能な条件下で当事者同士が「心理的に折り合う」方法としての解決原理を有しているという⁹⁾。

（2）中世の刑罰

中世法を代表する御成敗式目の刑罰の特徴としては、刑罰が身分制に従属していたことと、肉刑の存在が挙げられる。肉刑とは、「鼻そぎ」等身体を損壊する刑罰であるが、勝俣鎮夫氏は、この肉刑を行う法意識として「①異形にすること②反映刑③死刑との併科による死体損壊」という3つの刑罰観の存在を指摘している¹⁰⁾。

①の異形とは、受刑者に単に苦痛を与えるだけでなく、その外貌を変えるところに狙いがあった。また②の反映刑は、罪を犯す時に使用した身体の一部を直接損壊する刑罰である。さらに③の死刑との併科による死体損壊は、受刑者の死骸を損壊し、「永遠の亡者」とする意図があったとされている。

Ⅲ「中世の罪と罰」の授業構成の原理

1. 教材化の視点

(1) 中世の罪

①盗みの罪

現代の少年犯罪の中で最も多いのが、「窃盗」である。「もの」が豊かで使い捨てが横行する社会では、「もの」軽視の感覚を生み、盗みに対する軽罪観を生じさせやすい。このような現状認識から中世在地社会の「窃盗重罪観」とその基底にある「もの」と「盗み」に対する観念に着目した。

②悪口の罪

近年、社会問題化している「いじめ」行為の顕著なものに「悪口」がある。その多くは身体や性に関わるものであるが、御成敗式目の規定においてもそれらの行為は悪口罪と見なされていた。ここに時空を超えた現代との共通性が窺える。また中世では言葉の呪力性が信じられており、「静寂」と「喧騒」の問題は、現代の公共空間を考察する上においても多分に示唆的である。

(2) 中世の裁判

全国一元的法制度の現代とは対照的に、幕府法や本所法等がそれぞれに法効力を有する分権的法秩序の展開が中世社会の特質である。また裁判手続きでは、訴人による論人への訴状提出と法の証明等「当時者主義」が徹底していた。さらに現代の裁判と比しても特異な「籤」等の神判による裁判方法は、一方では日常生活における習慣として現在まで伝来しており、その比較考察は興味深い視点といえよう。

(3) 中世の刑罰

中世刑罰の特徴である「肉刑」(異形・反映刑・死体損壊)は、犯罪の発生を防ぐという「一般予防」と受刑者の「恥をさらす」という刑罰観によって支えられていた。それ故苛酷な刑罰が科されたのである。翻って現代の刑罰に目を転じれば、わが国の現行の刑罰制度は、死刑を除いて労働を主とする懲役刑である。これは、犯罪者を可能な限り社会的に更生していこうとする刑罰観に立脚している。その一方で、中世の肉刑に見られる「反映刑」の法意識は、現代の我々の深層にも残ってはいないだろうか。幼少の時にいたずらをして肉親から「手」を叩かれたり、口ごたえしようもの

なら「頬」をつねられたりしたりするという行為に、「反映刑」の法意識の名残が窺えよう。

2. 授業過程の構成

授業過程の組織化については、以下のように構想している。

- ①生徒の日常の法意識を手がかりに、中世の人々の法意識について推理させる。
- ②史資料等によって中世の人々の法意識を検証する。
- ③現代社会や生徒自身の法意識と中世の人々の法意識との比較考察を行う。
- ④生徒各自の法意識を他の生徒との批判的検討を通して、反省的に吟味する。

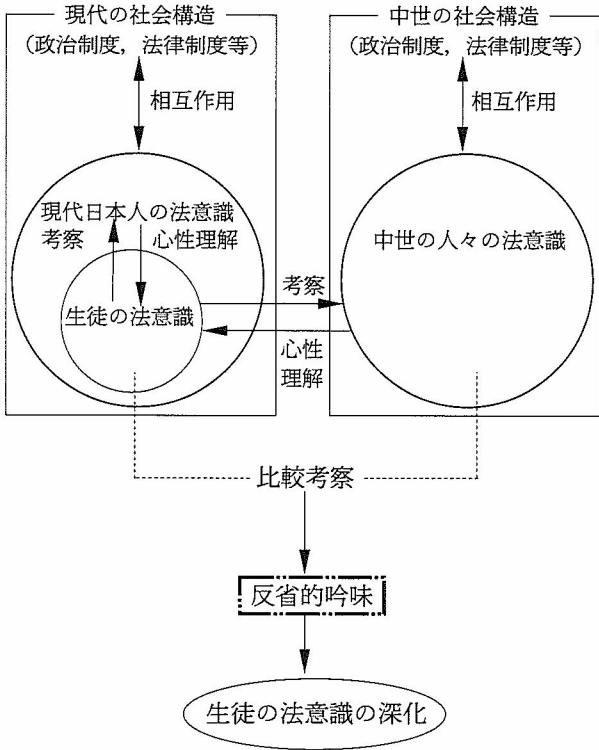
上記授業過程①は、中世の人々の法意識の解釈を、生徒自身の主観や経験則等から推理し仮説を立てるというものである。ここでは先ず、生徒自身の主観や発想を大切にすることによって生徒の授業に対する興味・関心を惹起し、後の学習意欲の継続を図るという意図がある。

続いて②は、仮説検証の段階である。授業者からの史資料等の提示により仮説の客観化作業を経つつ、生徒自身が中世の法意識を探究し、その意味を解釈する。

また③では、歴史事象の探究・解釈を通して自己と社会を見つめる目を育てるのがねらいである。そのために中世の法意識と現代社会や生徒自身の法意識との比較考察を通して、中世の法意識との共通性や異質性に着目させたい。比較対象間の異質性が顕著な程対象認識は深まるし、逆に共通性の発見は歴史の連続性の実感から生徒の対象関心が高まると考えるからである。

そして④では、それまでの授業過程の中で得られた生徒の現代社会や自己の法意識に対する生徒同士の相互批判を通して、自己の法意識を再構成(例えば、「盗み」をどう位置づけ、どのように実際の行動をしていくのかを意思決定すること)する。ここでは、このような法意識の再構成過程を「反省的吟味」として位置づけている。最後に、生徒の法意識を視点とした授業過程をモデル化す

れば次の図のようになる。



IV 「中世の罪と罰」の歴史授業モデル

本項では、中世の法意識論に基づいた中学校用歴史授業モデル「中世の罪と罰」を提案する。本単元は、カリキュラム上、中世史の通史学習の終了後に位置付けて学習できるよう配慮した。

1. 単元計画・目標

- (1) 小単元名 「中世の罪と罰」
- (2) 小単元目標
 - ・「中世の罪と罰」の事例を通して、中世の人々の法意識を探究する。
 - ・中世と現代における人々の法意識との対比を通して、生徒の法意識を深める。
- (3) 小単元構成
 - ・第1時 「盗み」の罪

4. 授業モデルの展開

[注記] 直接的に法意識に関わる問い・学習内容 ○ 「問い」 ◇ 「指示・説明」

	発 問・指 示・説 明	教授・学習活動	資料	学習内容（予想される生徒の回答）
導 入	第2時 ◇今日は「悪口の罪」について学習します。			

- ・第2時 「悪口」の罪
- ・第3時 「悪口の罪」と私たちの罪意識
- ・第4時 「裁きとしての神判」
- ・第5時 「刑罰としての肉刑」
- ・第6時 「神判・肉刑」と私たちの裁判・刑罰観
- ・第7時 「中世と現代の法意識」

2. 授業モデルの実際

ここでは、紙数の都合上第2時の「悪口の罪」と第3時の「盗み・悪口の罪と私たちの罪意識」を次に示す。（但し第3時のうち、「盗みの罪」に関する箇所は除く）

第2時 「悪口」の罪

＜目標＞・「身体的・身分的蔑視表現」, 「性的タブー表現」, 「言葉の呪力的音声表現」としての「悪口」の法意識を理解する。

第3時 「悪口の罪」と私たちの罪意識

＜目標＞・「中世の悪口の罪」の学習を整理・相対化しつつ、現代の公共空間における「喧騒と静寂」に対する法意識を省察する。

3. 習得させたい主な知識

- ・日常生活の中で、高い声や音は、「穢れを生む」と考えられた。
- ・言葉に人の意志が宿り、言葉通りに実現させる力（言霊）があるとの信仰があった。
- ・電車等公共空間では「静寂」が尊重され、祭等の非日常世界では、「喧騒」を肯定する傾向がある。

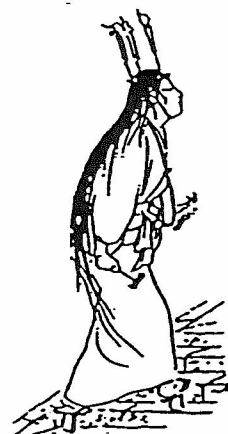
	<p>◇中世には、言葉には霊力が宿るとする「言霊」の信仰がありました。</p>		
	<p>6 中世の人々は「言葉の力」をどのようにコントロールしたのだろうか？</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>なぜ高声を出したり、勝手に音を鳴らしたりしてはいけないのだろうか？ (寺社参詣の前に水で手や口を洗う習慣に関連づけて考えてみましょう)</p> <p>《補助発問》 どういう時に高声を出したり、音を鳴らしたりしたのだろうか？</p> </div> <p>7 中世の人々は言葉に霊力が宿るとする「言霊」信仰を持ち、それ故に勝手な言葉の使用を嫌ったことがわかりました。ここから推理して、なぜ悪口により追放された農民の家までも焼き払われたのだろうか？</p>	<p>T:①⑫の提示後仮説を設定させる ↓ P: 発表 T:補助発問を行い⑬を提示しつつ仮説を検証させる。⑭で説明</p> <p>T:生徒氏名 P:答える</p> <p>T:生徒氏名 P:答える</p>	<p>①⑫</p> <p>⑬</p> <p>⑭</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>日常空間においては、高い声や音は「穢れを生む」として忌み嫌われたから。一方、市場や祭等の非日常空間での高い声や音は自由であった。</p> </div> <p>・(穢れを生み、神仏の罰があたるから。周囲に迷惑になるから。) (めでたいとき。非常事態の時)</p> <p>・村の団結を乱す悪口により穢れが発生し、その除去のために悪口を言い放った者の家を焼き払ったと考えられる。</p>
まとめ	<p>8 今日学習した「悪口の罪」について考えたことや感想を記入しましょう。</p>	<p>P:記入する</p>	
導入	<p>第3時 ◇今日は前時で学習した「悪口の罪」を通して私たちの罪意識について考えていきたいと思います。</p> <p>1 中世ではどのような言葉が「悪口」とされましたか？ ○これら中世の悪口は、現在では悪口となるだろうか？</p>	<p>T:生徒氏名 P:答える T:生徒氏名 P:答える</p>	<p>・「盲目、非人、母鬻」等肉体的、身分的、性的蔑視表現が悪口とされた。</p> <p>・現在でも悪口とみなされる。</p>

展 開	◇中世では、悪口だけでなく、音声表現としての言葉が信じられていました。		<ul style="list-style-type: none"> ・日常空間においては、高い声や音は、「穢れを生む」として忌み嫌われたから。 ・（周囲が静かに話を聞いている時、図書館等。） ・（スポーツ観戦、祭等） 	
	2 言葉信仰の事例として高声等 がいけないとされました。 では「なぜ勝手に高い声や音」をならしてはいけなかったのだろうか？	T:生徒氏名 P:答える		⑮
	3 一方、「喧騒と静寂」について私たちの身の回りではどのように考えられているだろうか？	T:私語等の例に着目 P:グループ討議の発表 T:⑮提示		
開	高声や音を鳴らしていい時と悪い時とはどのような場合だろうか？ 4 高声等の非日常空間での容認の意識は、現在に伝わる「悪口祭」のあり方にも見られます。 ○それでは悪口祭のもつ意味とは何なのだろうか？	T:⑮を提示後 生徒指名 P:答える	⑯	現在でも電車等の公共空間では「静寂」が尊重される。一方祭等の非日常空間では「喧騒」を肯定する傾向がある。 現在に伝わる悪口祭は、悪口としての言葉の呪力を祭という非日常空間の中で「善の力」に転化させようとする意図が感じられる。
	5 今日の学習で、「悪口の罪」	P:記入する		
まとめ	の学習を通して現在の私たちの罪意識を振り返ることができたと思います。それらをまとめて記入しましょう。			

文治元年（1185）4月15日、源頼朝は自分に許可なく朝廷から官職を受けた関東の武士たちについて、墨俣川より鎌倉方面に入ってきたならば、斬罪（死刑）に処すと命令した。さらに頼朝は彼らの罪状の一部として次のような発言をした。

「(頼朝の許可なく) 官職を受けた関東の武士たちへ」

兵衛尉基清 《官職名》	目は鼠眼で、おとなしく奉公しておればよいものを。
刑部友景 《官職名》	声はしわがれ、ひつつれ髪、とてもお役人のがらでなし。
右衛門尉季重 《官職名》	顔はファファとしているのに、任官するとはあきれたものだ。



【資料出典】①「侮辱罪」(『岩波コンパクト六法』p.859) ②「源頼朝の発言」(貴志正造編『全釈吾妻鏡』1巻, 新人物往来社, 1976, pp.202-204) ③「盲目の記事」(前掲『全釈吾妻鏡』3巻, p.221) ④「乞食・非人」の記事(笠松宏至他編日本思想大系『中世政治社会思想』上, 岩波書店, 1972, pp.55-56) ⑤「楽頭の訴え」(竹内理三編『鎌倉遺文』10巻, 東京堂, 1976, p.107) ⑥「開」の意味(『日本国語大辞典』4巻, 小学館, 1973, p.207) ⑦「伴大納言絵巻」(週刊朝日百科『日本の国宝』93号, 1998, pp.5-6) ⑧「農民の悪口観」(笠松宏至他編日本思想大系『中世政治社会思想』下, 岩波書店, 1981, p.164) ⑨「言葉戦い」(金田一春彦他編日本古典文学大系『平家物語』岩波書店, 1960, pp.313-314) ⑩「うしのとき参り」(『国史大辞典』2巻, 吉川弘文館, 1980, p.82/前掲『日本国語大辞典』2巻, p.567) ⑪「宇佐八幡宮行事定文」(竹内理三編『平安遺文』9巻, 東京堂, 1964, p.3466) ⑫「騒音禁止令」(前掲『中世政治社会思想』下, p.175) ⑬「土一揆時の鐘・関の声」(林屋辰三郎他編史料大系『日本の歴史』3巻, 大阪書籍, 1978, pp.195-198) ⑭「一遍上人絵伝」(網野善彦他週刊朝日百科『日本の歴史』6「海民と遍歴する人々」, 1986, pp.28-29) ⑮「若者の私語」(「産経新聞」1997.9.11付記事) ⑯「悪態祭」(前掲『国史大辞典』1巻, p.54) 「足利市の悪口祭」(足利市のホームページ)

V おわりに

本研究では、「盗み」や「悪口」といった身近な事例を中心に、中世の法意識の探求を通して生徒自身の法意識を深める歴史授業モデル「中世の罪と罰」を開発した。

今後の課題としては、開発した授業モデルの実践を通して、生徒が法意識に対する関心をいかに高め、考察を深めたかを検証したい。さらにもう一つの課題としては、今回取り上げなかった古代や近世等異なった時代の法意識からの授業モデルの開発を行いたい。なぜなら中世以外の異なった時代との比較考察は、より広い歴史の視野から現代社会の認識を深めることにもつながると考えるからである。

【註】

- 1) 原田智仁・別府陽子「社会史研究にもとづく歴史授業構成(Ⅲ)ー 集合心性に着目した『土一揆の授業構成と実践分析』ー」(兵庫教育大学研究紀要第2部, 1992) pp.157-171
加藤公明「徳政一揆の農民は有罪か無罪か」(加藤公明『考える日本史授業2』地歴社, 1995) pp.71-94
- 2) 六本佳平「『日本人の法意識』研究概観ー法観念を中心としてー」(日本法社会学会編『法意識の研究』有斐閣, 1983) p.15

- 3) 福井憲彦「社会史研究の視点」(安田元久監修『歴史教育と歴史学』山川出版社, 1991) pp.225-226
- 4) 笠松宏至「盗み」(網野善彦他著『中世の罪と罰』東京大学出版会, 1983) pp.84-87
- 5) 笠松宏至「お前の母さん……」[前掲書4)] pp.4-11
- 6) 入間田宣夫「撫民・公平と在地社会」(『日本の社会史』5, 岩波書店, 1987) p.157
- 7) 網野善彦『増補無縁・公界・楽』平凡社, 1987, p.355
- 8) 笠松宏至「徳政令ー中世の法と裁判」(週刊朝日百科『日本の歴史』8, 1986) pp.38-41
- 9) 山本幸司「中世の法と裁判」(岩波講座『日本通史』中世2, 1994) p.103
- 10) 勝俣鎮夫「ミミヲキリハナヲソグ」[前掲書4)] p.36

※本稿の詳細については、乾 則夫『法意識を視点とした中学校歴史学習の研究ー「中世の罪と罰」を手がかりにしてー』(兵庫教育大学修士論文, 2000年)を参照されたい。